



「学び・すこやか塾」を引っ張る保健福祉部保健監・佐甲隆さん(中央)、福祉保健グループ主幹・萩原好子さん(左)、企画グループ主査・清田早苗さん(右)

康やストレス解消の大切さ」を周囲に伝えることで、職場の認識も変わってきたという。それらが評価され、今年度からは予算がついた。

「今日は来てよかった」と参加者が笑顔で帰ることは、健康教育の評価として認められにくいのですが、その満足がなければ周囲には広がりませんから、私は重要なことだと思っています。中には、文化活動とどこが違うのか、という意見もありましたが、体験した癒しが生活に定着すれば、メンタルヘルスに大きな意義があるといえます。究極の目的は、理想的な生活習慣を文化として定着させるということ。最終的には、文化と健康の仕事が重なり合うのが本来なのかな、と考えています」(佐甲さん)

## 広がる新しいネットワーク

局内では「学び・すこやか塾」をきっかけに、縦割りで交流がなかった部署間で日常的な交流が図られるようになってきているという。業務においても、健康のことは切り離して考えられないと認識されるようになり、農林関係の部署からは、農業経営者の奥さんを対象とした経営講座に健康をテーマにした内容を入れたいとの相談を受け、「学び・すこやか塾」のよ

うな形の講座が実施された。また、健康管理の担当者として「学び・すこやか塾」に参加した職員から「自分の職場で企画したいから講師を紹介してほしい」などの問い合わせがきたり、松阪市では、市職員を対象に健康教育の実施計画が進んでいるという。

「保健所が率先して実施していれば、こういう形の健康教育への理解を促進する力になり得る。ただ、この形は講師の側もそのつもりでないとできないし、企画の段階から詰めていかないと難しい。けれど、とても楽しいしやりがいもある。職場の責任者に参加してもらって、こんなやり方もあることに気づいてもらい、職場へ帰って話してもらえらると、いい展開が期待できると思います」(佐甲さん)

今年度からは、商工会議所の協力を得るなどして、企業への働きかけも始める。これは、特集でも紹介した健康日本21地方計画「ヘルシーピープルみえ21」で方針としている企業との協働の一つでもある。音楽療法には、中部電力(株)松阪営業所総務グループ主任の堀川晃さんが初めて企業から参加し



今回初めて企業から参加した中部電力(株)松阪営業所・総務グループの堀川晃さん。「気持ちがりフレッシュしてとてもよい企画だと思いました」

た。中部電力ではメンタルヘルス対策を推進しており、具体的な活動を企画する中で、単純な講義形式にしたいくないと考えていた時に、偶然、松阪保健福祉部の取り組みを知ったという。堀川さんは、「業務の特性から一度に人を集めるのは難しいけれど、体験することに主眼を置いた取り組み方は使えると思います」と話す。

体験し、実感することで、生活に生かせるものを掴んでもらう「学び・すこやか塾」は、参加者の心を動かし、新しいネットワークの形成にもつながっているようだ。

〈お詫びと訂正〉  
小誌1月号で紹介したトッパングループ健康保険組合の被扶養者数は、正しくは約4万2000人です。お詫び申し上げます。訂正いたします。